

やすらぎだより

2
月
号

陽気で緑にあふれた生活 それやすらぎ園です

コラム第140号

「平穏死を考える」

施設長 植田 誠



「身体が弱っていく自然な状態を経て平穏に最期を迎える」、平穏死の一般的定義である。東京にある特別養護老人ホームの医師、石飛氏が7年前に出版された『平穏死のすすめ』によって広がったこの‘平穏死’について、その石飛先生を招いた記念講演にて改めて考える機会を得た。

特養は医療施設と同じく、常に‘死’と向き合う場である。長い人生を全うされた高齢者の最期には幾つかの選択が迫られるが、‘看取り’としてその施設で穏やかに最期を迎えたいという想いは、現在では当たり前にも多くの方がご希望されており、施設も当然にその体制も整備されつつある。

先生の主張は明確だ。人間の死というものは自然の摂理、胃瘻等の人工的な栄養補給はその摂理に逆らう行為であり、医療の意味を取り違えていると。多くの方々を看取って来られた施設での現実の経験に基づく、医療とは何か人生とは何かを問う心揺さぶられる声であった。

多くの施設では一昔前、終末が近づいてこられた方々が迫られる選択の場面に、介護員等の現場スタッフが介入することは皆無に等しかったと記憶している。当事者である家族は熟慮の機会がないままに、医療関係者からの一方的な状況説明を踏まえ、医療処置の選択ともしもの時への対応に迫られていた。ご本人の尊厳を第一に考えながらも選択する術が少なかったと言え、平穏死という言葉さえ存在しなかった。

看取りケアが当たり前の現在、ご本人の普段のご様子を最も身近にそして最も心寄せて関わっている介護職は、チームケアの専門職の一員としてそして何よりご本人の代弁者として助言する場面が見受けられる。制度の理解と医療知識の乏しさをも補えるもの、それは日常の実践を通じて成し得る心強い説得力だ。結果的に、戸惑うご家族を勇気づける後押しともなり、「住み慣れた場所で最期を」に重みを加えている。

胃瘻や延命治療が悪ではなく‘自然な状態’も時とともに変化する。人生の最期に「こうでなければならぬ」ということはない。人生の終焉は一人一人が考えるもの。平穏死の意味が今問われている。



社会福祉法人やすらぎ会 実施事業

- | | |
|-------------------------|---------------------------|
| ○特別養護老人ホーム やすらぎ園 | ○ケアハウス やすらぎ |
| ○在宅サービス事業所
居宅介護支援事業所 | ○介護予防関連事業 |
| 訪問介護事業 | ○グループホーム むつみあい |
| 訪問入浴介護事業 | ○天理市ひとり暮らし
高齢者世帯等見守り事業 |
| ○短期入所生活介護事業 | ○低所得高齢者等住まい・
生活支援モデル事業 |
| ○在宅介護支援センター | |
| ○天理市東部地域包括支援センター | |